ラグビーW杯2003
その四　event & dress up

W杯・48試合、観客約184万人はまさに大イベントです。ビデオで見るだけでもわくわくします。NZでのテストマッチを思い出して、臨場感を盛り上げています。

日本は2011年のW杯開催候補地に手をあげています。夢もありますが、心配も大きいです。実施が決まっても、2007年W杯である程度の結果を出さないと、国内の盛り上がりに欠けてしまわないかと心配です。そのためには1次予選突破絶対条件です。184万人というと、5万人×20試合＋3万人×28試合ということになります。サッカーW杯の競技場を考えれば会場についての大枠の絵が書けますが、人の集まりが都会に片寄って集中していますから、トップリーグの興味あるゲームの地方開催など、地方を掘り起こさねばなりません。ラグビーワールド誌に、2011年W杯日本招致について、大議論と題して賛否両論が掲載されていますが、疑問についての課題は、サッカーW杯のような、サポーターの競技場をうめつくす応援活動が可能かどうかということです。

イベントとしての様相はますます拡大し、アトラクション顕著に盛大になってきました。楽しいことは良いことですし、ラグビーの普及につながり、感動を増幅します。観衆の服装や服飾デモンストレーションも自由で個性的になりました。開放的で、派手で、賑やかで、実によく楽しんでいます。

試合前のセレモニーは、厳粛さと華美の共存させて、うまく演出されています。規模内容の巨大化だけでなく、光・音響などあらゆる効果を駆使して盛り上げています。

グランド自体の華やかさだけでなく、プレーヤーの服装にも目を見張るものがあります。選手のジャージのデザインは、W杯の回を追って派手になっており、識別に良いという域を越えて、芸術の域に至り、チームのインスピレーションにマッチし、ジャージの形と色に対する観念もまさに現代的です。日本も赤白の縞に桜のマークから脱しましたが、試合に負けた時にふと前のままのほうがよかったのではと思いました。プロ化の影響もあるわけですが、プレーヤーのニーズや、素材の発達について考えるよい機会を作ってくれました。

LAW 第4条の標題は、昔からずっと PLAYERS'DRESS でしたが、ミレニアムを機に PLAYERS'CLOTHLNG になり定義も加えて形を整えられました。

dress 衣服は裸に対比する言葉で、着飾るという意味もあって、紳士の身だしなみが求められました。ルールの内容は危険防止が主でした。運動が自由で危険でなければよいということで一貫していまはた。色はチーム統一していて、相手の識別ができればよいということです。

clothing 服装は必要性と実用性の服装全般の意味で、肩当て、靴の鋲なども含めて細かく規制されるようになりました。襟の形は変化の兆しがありましたが、一様に幅の狭い小さいものになりました。昔風のものは不用というのです。襟を捕まれるというデメリットが問題になっていました。偶然に手が入り掴む状態になることが屡見受けられました。

日本協会が独自に昔風の襟に統一することは、ローカルルールとしては問題ではありませんが、IRBを越えることであり、それがつまらないところでコンプレックスの原因にならないように配慮しなければならないでしょう。世界に遅れないためには、若い人の好みを吸収する柔軟性も大切なものです。

2004.01.11
西川　義行